

初期プラトンの哲学 (3)
—『ゴルギアス』における徳福一致の問い—¹

Plato's Early Works (3):
On the Problem of Virtue and Happiness in Gorgias

平野 織

Oribe HIRANO

大阪経済法科大学 21世紀社会総合研究センター 客員研究員

目次

- I. はじめに——ひとは如何に生きべきか
- II. アテナイ社会とプラトンの思想
- III. ゴルギアスとの対話——正義の問い
- IV. ポロスとの対話——徳福一致の問い
- V. カリクレスとの対話——人生の問い
- VI. 善いとは何か——善の問い

キーワード：初期対話篇 徳福一致 哲学 善

I. はじめに——ひとは如何に生きべきか

ひとは如何に生きべきか。21世紀をむかえた現代においても、古代ギリシアの哲学者プラトンが挑んだこの問いは重要な問いであり続けている。しかしながら、この問いを前にして、ひとはしばしば「テツガク的だね」と反応する。というのも、複雑な現実社会において、この問いはいくら考えてみても答えがでないか、そういう問いをわざわざ小難しく考えていると、そのようにひとは判断するからだ。「テツガク的」な人生の問いに取り組む哲学について、プラトンの対話篇『ゴルギアス』に登場する、ある意味で有名な若手政治家カリクレスは、ソクラテスに対して次のように言う。

いいかね、ソクラテス、哲学というものは、たしかに、結構なものだよ、ひとが若い年頃に、ほどよくそれに触れておくぶんにはね。しかし、必要以上にそれにかかっていると、人間を破滅させてしまうことになるのだ。なぜなら、せっかくよい素質をもって生まれて来ている、その年頃をすぎてもまだ哲学をつづけていたので

は、立派なすぐれた人間となって、名声をうたわれる者となるのに、ぜひ心得ておかなければならないことがらを、どれもみな心得ないでしまうにきまっているからだ。
(484C-D)

空理空論に戯れ、議論の勝ち負けにいそしむより、現実社会で実のあることをなせ。カリクレスはこのように言う。これをソクラテスは、「ひとは年老いたると若いとをとわず、どのような人間であるべきか、そしてどんな仕事に、どの程度まで従事すべきか」(488A)、つまり「ひとは如何に生きべきか」(492D)という重要な問題として受け取り、この問題にいかに応えるべきか明らかにしようとする。ソクラテスは、哲学をもとによく生きることによってこそ、ひとは幸福になるのであって、不正をなして生きるものは不幸であらざるをえないと考える。ここに、徳をもって生きることと、幸福であることと必ず一致するという徳福一致の思想があらわれている。『ゴルギアス』においてすでにこうした思想に疑義が表明されているように、現代の生の感覚においても徳福の一致については容易にうなずき難い。にもかかわらず、「ひとは如何に生きべきか」という問いに答えようとする徳福一致の思想の動機そのものには、現代にも通底する価値があると考えられる。現実の困難を前にするとき、ひとはあらためてこの問いに突き当たるからである。どのようにすればひとは納得しうる答えに出会うことができるのか。

とは言いながら、『ゴルギアス』の出発点は弁論術をめぐる問いにあり、この対話篇はソフィスト批判を主眼とするように見える。弁論術をめぐる問いの途上で、哲学および先の人生の問いがあらわれでてくるのである。しかしながら、この対話篇の議論を仔細に追うとき、ソフィスト対ソクラテス、あるいは政治対哲学という構図のなかに、善・悪、正・不正、美・醜、快・苦、幸福・不幸、徳といった複数にわたる価値軸が投じられ、この議論が大いに錯綜していくことがわかる。こうした流れの混乱によって『ゴルギアス』はある読みがたさを抱えている。そこで本論は、「ひとは如何に生きべきか」という問いをもとに『ゴルギアス』の整理を行う。そうすることで、プラトンがこの問いに哲学をもってどのように答えたかをあらためて吟味し、『ゴルギアス』が内包している問題について考えてみたい。まず、当時のアテナイ社会の状況を踏まえることから始めて(第Ⅱ章)、『ゴルギアス』における対話を、正義の問い(第Ⅲ章)、徳福一致の問い(第Ⅳ章)、人生の問い(第Ⅴ章)として取り上げ、これらの問いの中心にあらわれている問いを善の問い(第Ⅵ章)として考えてみたい。

Ⅱ. アテナイ社会とプラトンの思想

ペルシア戦争の勝利と経済的発展、民主制の採用において紀元前5世紀中頃、アテナイは隆盛を誇った。たんに軍事力や家柄だけでなく言論が力をもつようになったその栄光のなかで、家柄のよい若者たちは、自分自身も国事に携わり成功し、ほかの市民たちから称

賛されたいと願った。そのためには個人の資質、すぐれた能力・徳をもって、国家公共の事柄にかかわって活躍しなければならなかった。だからこそ、どの人物に就いて学べばすぐれた人物となり、名誉を得ることができるか、といったことに関心を払ったのである。そこで、言葉のもつ力を早くから認識し、その巧みな操作を習得した者は、ソフィストとして徳の教育を公言するようになった。そして、国事に携わるための弁論能力を、高額な金銭と引き換えに授けるとした。プラトンのさまざまな対話篇において、プロタゴラス、ゴルギアス、プロディコス、ヒippias、イソクラテスといった著名なソフィストの名前が挙げられ、さまざまに主張した内容が語られているし、ソフィストを欲した若者の姿もたびたび描かれている。しかしながら実在したソフィストたちは、プラトンのようにはあまり著作を残さなかったか、著していたとしても散逸してしまったために、現代ではほとんどその思想的内容を十分に復元する手段がない。そのためプラトンがなした徹底的なソフィスト批判により、ソフィストは否定的な評価を受けることとなっている²。

ところで古代ギリシアの文化は、言論が、文化的価値や意味を相対化する力、抽象度の高い議論を可能とする力を得ていく過程を徐々に経験するとともに、アテナイは同じギリシア内のスパルタとの覇権争いから生じて長期化していたペロポネソス戦争の敗北を経験する。その結果、紀元前5世紀末アテナイにおいて独裁政権の樹立と愚衆政治の深刻化とが立て続けに起こり、激しい政治闘争を生み出していた。言葉の深化がもった相対化の発明と、社会および道徳の退廃が重ねあわさるなかで、ソフィストにその責任の一端を帰す風潮があらわれる。プラトンは、そうしたソフィストの側面をある意味で戯画化し強調したと言える。後期プラトンの著作『法律』が記すには、絶えない争いのなかで力をもった者が権威を得るところでは、力をもつものこそが正義であるという風潮、他人に対する支配ということが価値の優位を占めることになる³。そこでは力あるものが意味を作り出すのであって、普遍的な価値の探求など徒勞であるとする考えが育つ。ソフィストは真に考えるということをやめ、言葉による議論の勝ち負け、力の思想を訴えることで、そういう土壌を醸成した、とプラトンは考えた。また、意味や価値を相対化させるような議論を行い広めることで青年を道徳的に頹落させたとして、ソクラテスに責任を被せ、アテナイ市民みずから彼の刑死を決定した。このこともおそらく、プラトンの哲学の端緒となっているであろう⁴。

「ひとはいかに生きべきか」と問うプラトンの対話篇は、政治や社会の腐敗がいかに個人に影響を及ぼすかといった背景をもって描かれる。対話篇の主人公・ソクラテスは、さまざまな知者のもとへ訪れ、問答を繰り返してこの問題を明らかにしようとする。知者の類型として、1) 詩人、2) 政治家、3) ソフィストなどがあらわれる。これらの類型に対する批判の大枠は『ソクラテスの弁明』において語られている。ソクラテス曰く、これらさまざまな人のもとを訪れ、いずれの者も何がしかを知っていると公言しながら、話し合っていくと実は知らないということが明らかになった。それゆえ、自分自身で、善く生きることだと答えることとなる。とくに2) 詩人に対しては『イオン』、4) ソフィ

ストに対しては『エウテュデモス』『メノン』『プロタゴラス』『ゴルギアス』といった初期対話篇において主題化されている。では、『ゴルギアス』において、ソフィストのもつ言葉の力、つまり弁論術はいかなるものとして描かれ、批判されているのか。この対話篇は、ソフィスト・ゴルギアス、その弟子のポロス、若手政治家カリクレスと三人をそれぞれ対話者として描いていく。一問一答を要求するソクラテスだが、質問ひとつひとつが細くなりすぎており、そのことで意味のまとまりが捉えにくくなり、ストーリーのまとまりを逸してしまいやすい。本論では以下、ソクラテスが何を明らかにしようとしているのかをはっきりさせるため、いくつかの問いを意味のまとまりにおいて捉えることにしたい。

Ⅲ. ゴルギアスとの対話——正義の問い

この対話篇は、ゴルギアスはいかなる力を持ち、どんな事柄を教えているのか、という問いが明示されてはしまっているが、ポロスとカレイポンとの会話を捉えたソクラテスによって、次の形に変形される。これが本対話篇の出発点となる問いである。

問い (1) ゴルギアスのもつ技術は、何であるか (①)、またその技術をもつゴルギアスを何と呼べばよいか (②) (448E)

ゴルギアスの弟子・ポロスは、こうした問いに対しては、ゴルギアスは立派な技術を身につけている人だと演說的に答えている。しかしながら、ポロスの答えは質問されたことに答えたことになっていない。ソクラテスいわく、ゴルギアスのもつ技術の本質を問うているのに、技術の「すぐれた」という性質を答え、またゴルギアスを賛美することに注力しているからだ。こうしたゴルギアスの弟子の答え方において、人をすぐれた者にするというゴルギアスの公言する教育が、実際には果たされていないことが、示されている。ソクラテスは、片方が一方的に話すのではなく、あくまで一問一答で互いに話しあうという哲学的方法を選ぼうとしている。

この次にあらわれるのが、ゴルギアスである。彼は、ソクラテスの言う問い (1) に対して、①弁論術、②すぐれた弁論家と答える (449a)。ゴルギアスとの対話は、ここにいう「弁論術」という能力が主題となる。この能力がはっきりすれば、すぐれた人間を教育する、という仕事を検証することができるだろう。ゴルギアスが、ほかの人をも弁論家にすることができるかと認めたうえで、ソクラテスはゴルギアスに問う。

問い (2) 弁論術とは、何を対象とするどのような技術か。(449c-454b)

ゴルギアスは答える。それは、人間にかかわりのある事柄のなかでも、一番重要で、一番

善いものにかかわることである。それは、正しいことや不正なことについて言論によって人々を説得する能力だ。この能力によって、法定・政務審議会・民会といった集会において、人は自分自身には自由をもたらし、自国において他人を支配できるものだという。人々を説得し思うようになすことができるという能力こそ、「最善のもの」である。ゴルギアスこそ、こうした説得する能力を人に与える/教えることができるのだ。こうゴルギアスは主張している。弁論術のもつ話す能力・考える能力（449e）をもって人を説得する。この能力は、確かに、多くの人がすぐれた力だと思うことだろう⁵。しかし、ソクラテスは考える。「善い」という問題は、人によって意見が異なり、なかなか決着がつく問題ではない。健康（医者）、器量の良さ（体育教師）、富（実業家）こそがもっとも善いものだとそれぞれの人は言っているのだから。ゴルギアスのいう最善を突き詰めていくことは、ソクラテスにとって重要な課題となる。それゆえ、ソクラテスは一問一答のかたちでゴルギアスに質問を重ねる。

以下、ゴルギアスの主張した「弁論術」について、ソクラテスがゴルギアスとともに吟味していく。ここからゴルギアスの考えは大きく揺れ動くことになる。

吟味（1） 弁論術は、集会において、信じ込むことだけが生ずるような説得であるか、それとも、知識をもたらし説得か。（454e）

ソクラテスはゴルギアスに問う。ゴルギアスは、信じ込むことになる説得の方だ、とあっさり答えている。ゴルギアスは、大衆のまえではさまざまな領域の専門家よりも、そうした各領域の事柄について自分のほうが選ばれるように説き伏せることができる、そういう力を弁論術がもつと繰り返す。ここでソクラテスが明らかにしようとしているのは、弁論術は、論じる事柄そのものについての知識（「それがどうあるか」459b）を知らずして、それを知っているのだと見えるようにする、そういう工夫ではないか、ということだ。一般にものごとを知らない大衆たちに対してだけ見せる、そういう人が弁論家なのではないか。だから、弁論術は、知識を教えるものではなく、もっともらしい信念を与える力だ、ということになり、弁論家は知識をもっていない者だということになる。そうだとすれば、弁論家はすぐれた人たちだとする市民からの評価は偽りのものだということになってしまう。しかしながら、ゴルギアスは、ほかの技術を学ばなくても弁論術さえ学べば、ほかの専門家たちに引けをとらないというのであれば、この技術は大変便利なものだ、ということになるのではないかと述べる。さまざまなことごとについて判断し説得できるためには、つまり国事に携わり名声を得るためには多くの知識が必要となる。そのため、さまざまな分野について苦勞して学ばなければならない。ギリシアの若者たちは、国事において名声を得るためにソフィストのもとへ学ぶことを望んでいた。だから専門的な学術を習得しなければならないというのは遠回りに思われたのである⁶。

ソクラテスの吟味は続く。人間にとって重要な価値の問題について、弁論家は心得てお

く必要があるのかどうか、それをさらに問おうとする。

吟味 (2) 弁論の心得ある者は、正・不正、美醜、善悪そのものについての知識をもたずして、知っているように思わせるのか。それともほんとうに知っているの
でなければならないのか。(459d-e)

真善美といった価値（ここでは、真は正として語られているが）は、ソクラテスが長い間携わってきた問題であり、ソフィスト・弁論家の価値を見定めるうえでの指標となるものだ。弁論術に関する問いは、正義の問いとしてあらわれる。しかしながら、ここでゴルギアスは、これらの価値について知らないとは言えない。それらを教えると公言しているからだ。だからこそゴルギアスは、彼のもとを訪れた者が、これらの事柄について知らないなら、それらのことをも学ぶだろうと答えざるをえない。ここでソクラテスは、ゴルギアスの内的な矛盾を指摘する。正しいことについて学ぶことになるのであれば、その人は正しい人になるのではないか。また正しい人は、どんな場合にも不正を行うことを望まないでしょう。こう問いかけ、ゴルギアスの同意を得る。そうすると弁論の心得のある者は、正しい人でなければならない、また不正を行うことを望まないことになる。しかしながら、ゴルギアスはそれまでに次のように言っていた。弁論家はどんな人や、どんな事柄についても弁ずることができる人間であるが、だからといって他の専門家の名声を剥いでよいわけではないし、正しくその能力を使わなければならない。しかしながら、もし弁論術を教わった弟子が弁論術を不正に用いることがあるとしても、その技術を教えた弁論家を責めるべきではないし、弁論術そのものが悪いわけでもない。これは、自らの能力を最大限大きく見せながらも、自らの立場を擁護するような独特な含みの有る言葉である。不正を行わないはずの弁論家が不正を犯すことがあるという矛盾を、ソクラテスはゴルギアスの同意とともにあらわにする。

IV. ポロスとの対話——徳福一致の問い

ソクラテスが先の矛盾をあらわにしたところで、再度ポロスが話に割って入ってくる。弁論家は正しいことについて知っており、他の人にもそれを教えるということを、頭から否定する人はいない。ソクラテスは、ゴルギアスに仕方なく同意させ矛盾へ追いやったのだ。それはずいぶん失礼なやり方だ、と。ここで議論の「立て直し」が行われる。ここで徳福一致の問いがあらわれるが、そのことで『ゴルギアス』の議論は錯綜しはじめる。ポロスとソクラテスの対話において扱われる大きな問いは以下の二つだ⁷。

問い (3) 弁論術とはいかなるものか。また、弁論家とはいかなる者であるか。

問い (4) 幸福であるとはどういうことか。また不幸であるとはどういうことか。

この二つの問いの絡み合いが、話の筋を複雑にしている。これまで正・不正を扱う「弁論術」を巡って議論が進んでいたが、ポロスとの対話にいたって幸福-不幸という軸が物語の進み行き上、自然とあらわれてくる。正-不正と幸福-不幸という二つの軸の絡み合いと、対話者同士の意見の不一致、それにソクラテス=プラトンが打ち出す徳福一致の思想が必ずしも多くの人を頷かせるものとはなっていないことが、『ゴルギアス』を読みにくくさせている⁸。言い換えれば、徳福の一致をめぐる起こる先鋭的な意見の対立という事態が、『ゴルギアス』の難しさを生み出し、かえってこの対話篇への注目を集めている。

まず問い(3)についてポロスは、ソクラテスに問う。弁論術とは何であると主張するのかと。ソクラテスは、ゴルギアスの議論を踏まえながら、弁論術とは自分の提供するものの性質に関する理論的な知識をもたないため、技術とは言えず、ひとびとに喜びや快樂を作る経験・熟練にすぎないのだと答える。そして、その眼目は「迎合」であり、劣悪で醜いと言う。迎合という経験(ソフィストの術・司法、化粧法・料理法)は、最善を目指して魂・身体の世話をする技術(政治術・立法術・司法術、身体を扱う技術・体育術・医術)のふりをしながら、その時々が一番快いことを餌にして無知な人を欺き、自分こそ値打ちのあるものだと思わせている⁹。この迎合は、理論的な知識をもたず、最善ではなくその時々快を目指しているにすぎないというのが、ソクラテスの批判のポイントになっている。弁論術は、魂の領域において最善を目指すことなく、聞こえのいい言葉を利用して快樂を目指す経験である。そして、弁論家とは、そうした経験を扱って、無知な大衆を欺き、みずから値打ちあるものだと思わせる者を言う。元来ソフィストと弁論家は、立法術と司法が区別されるように、区別されるべきであるが、混同されているという。

こうしたソクラテスの主張を受けて、ポロスは驚く。ゴルギアスによる弁論術や弁論家に対する考えを引き継ぐポロスにとって発せられる吟味すべき事柄は次のようなものだ。

吟味(3) 弁論家とは、それぞれの国において一番力のあるものではないか。

ポロスの考えによれば、弁論家とはそれぞれの国において一番力のあるものである。つまり、ゴルギアスが言っていたように弁論家とは、自国の他人を支配し、自分の思うとおりに自由を与える能力をもつ者だ。独裁者たちがするように、死刑・財産没収・国外追放することを自らの望むとおりに仕向けることができるのだから、力があると言えるだろうというのが、ポロスの考えだ。

ソクラテスは、力のあることが、その人にとって何かのためになる善いことだとすれば、弁論家はその国の中で一番力がないと反論する。自分たちが望んですることが善いことではなく、実は悪いことであるならば、その人のためになることではない。ためになることでないならば、「力がある」とは言えなくなってしまう。だから、死刑・財産没収・

国外追放といった刑の執行が、それを命ずる弁論家にとって善いことであると言えないならば、その弁論家は、思う通りのことはしているかもしれないが、力があるとは言えない。ここであらわれたソクラテスの原則をよく確認しておこう。

原則 (1) 人は、その人の益になる善いことを望むのであって、善くも悪くもないものや悪いことを望むわけではない。(468c)

ここに「善い」「悪い」という軸があらわれていることに注目したい。人は、その人にとって善いことを求めるという考えは、ソクラテスにおいて終始変わらないものだ。またポロスや次の対話者・カリクレスも、人は善いことを望むという点については否定しない。しかしながらこの結果に、ポロスの同意を伴いながら進んできたにもかかわらず、ポロスは腑に落ちていない。なぜなら、「思うとおりにする」ということ、つまりみずからの能力を振るうというところに自由と善さを感じているポロスにとって、このこととソクラテスの言う「ためになる善いこと」との区別がついていないからだ。ソクラテスにとっては、不正な仕方でも人を思うとおり死刑にしたところで、その人は不幸であり、羨ましいことではない。しかしながらポロスにとっては、不正な仕方でも死刑になる方が不幸である。そこでソクラテスは先の原則から導かれる原則を述べる。

原則 (2) 人に不正を行うのは、害悪のなかでもまさに最大の害悪である。また、不正を行うか、それとも不正を受けるか、そのどちらかがやむをえないとすれば、不正を行うよりも、むしろ不正を受けるほうを選びたい。(469b-c)

原則 (3) 立派な善き人が男でも女でも幸福であるし、反対に不正で邪悪な者は不幸である。(470e)

ここに、善・悪と幸・不幸という2つの軸が交わる領域があり、幸福・不幸に対する問い(4)への応答がある。善く正しい人が幸福であるという徳福の一致をもとにすれば、不正を行う者は不幸である、が帰結する。ソクラテス＝プラトンの主張において、おそらくこの点が多くの人にとってわかりにくい部分となっている。この2つの軸の4項は、必ずしもこのように結びつかないのではないかと人は考えるからだ。みずからの生活を振り返ってみたとき、ポロスが次に考えるようなことを思うのではないかと。

吟味 (4) 世間には、不正を行っていないながら、幸福な人間が数多くいるのではないかと(470d)

ポロスにとっては、権力を持つ者が羨望の対象となっているので、彼らが不幸だとは思わない。不正を行なっている彼らは幸福に暮らしている。しかし、ソクラテスによればこ

の反論は、名の通ったひとびとを証人とする弁論術のやり方であって、偽りの証言である場合がある。そのため、こうした数と名をもとにした反駁は真理に対しては意味がないという。あくまでソクラテスは、自身による論証の力で「たしかに」と同意せざるをえないようにすることを望む。ポロスの考えに反して、ソクラテスは、不正なことをした人間のうち、罰にも処されない者はより不幸であり、罪の償いをするものは不幸はまだ少ないと言う。これは、その人にとってためになるかどうか、善きことであるかどうかが判定のポイントになっている。罰を受けることが苦痛を伴うとしても、その人にとってためになるのであれば、その苦痛を伴う罰を選ばなければならない。しかしながらポロスにとっては、罰を受けることによる苦痛そのものが不幸だと考えている。

ここで、幸福と不幸の順が決定される。魂の中に悪をもたない人間が一番幸福であり、その次に正義をもって裁きを受けて悪から解放される人が続くが、最も不幸な者は悪をもって解放されないものとなる。人は、不正を行わないよう注意を払い害悪を避けなければならないが、不正を行ってしまったとあれば裁きを受けなければならない。弁論術は不正を行うことではなく、むしろ最大の悪である不正から解放されるように用いなければならない。単なる苦痛の回避、またその時々 of 快楽の追求のために弁論術を用いるのであれば、それは迎合である。そうソクラテスは言うのである。ここにあらためて、快苦という軸が導入されている。ここでもやはり、原則 (1) のとおり「善い」ことのために、快楽ないしは苦痛は選ばなければならない。次にあらわれる政治家カリクレスとの対話は、主にこの「快楽」を軸に行われる。

V. カリクレスとの対話——人生の問い

カリクレスは、ポロスがソクラテスに仕方なく「不正を行う方が不正を受けるよりも醜い」と同意してしまったといい、そうした価値観は習慣であって、自然なこと、つまり真理ではないと指摘する。自然においてはむしろ、正義とは強者が弱者を支配し、弱者よりも多く持つことであると主張する。ここでも、ゴルギアス、ポロス同様にカリクレスは、力と支配にこそ善いものがあると考えている。カリクレスは、こうした自然の法に反して、世の多数の弱者たちが不正を行う方が醜いことだし、平等にもつことを善いとする。ほかの2人よりもはっきりと述べるカリクレスは、本論冒頭に記したようにソクラテスに哲学だけでなく、現実社会・政治で必要とされる事柄を勧めるのである¹⁰。カリクレスとの対話において問われ、吟味されるべきは、次のことだ。

問い (5) ひととは年老いたると若いとを問わず、どのような人間であるべきか、そして
どんな仕事に、どの程度まで従事すべきか = ひととは如何に生くべきか。

吟味 (5) 強者とはいかなる者か。(488b-491b)

強者がより多くもつべきだ、とするカリクレスの主張を考えるため、ソクラテスは問い(5)を発する。カリクレスは、強者とは、国家公共の事柄に関して思慮があり勇気のある人のことであると答える(488c-491d)。また、そうした強者こそ国家を支配するのがふさわしいとする。この強者は欲望を抑えず、思慮と勇気をもってこの欲望に奉仕するものである。よきものの享受を許された人にとって、節制や正義の徳などは害悪であって、力をもった贅沢、放埒、自由こそが人間の卓越性(徳)であり幸福であるとカリクレスは主張する。つまり、カリクレスは、快楽を充たすことが幸福となるというのである。彼は、ここでは快楽主義者としてソクラテスに対峙する。ソクラテスは、自分で自分自身に打ち克ち、節制する人、自分のなかにある欲望やそれに伴う快楽を支配する者を想定していく。カリクレスに言わせれば、節制や正義を善しと考えるのは、欲望をみずから充足できない世の大衆がみずからの無能を覆い隠そうとしてのことにすぎない。

吟味(6) 善と快楽は同じものか。(494c-498c)

ソクラテスは、孔のあいた盗、疥癬などの比喩・例を用いながら、快楽の質的区別をしないまま、愉快にしている者がただちに幸福なのではないと言おうとする。むしろ善い快楽と悪い快楽というように、質的な違いがあることをカリクレスと確認しようとしている。

(1) 善と悪は正反対のもので、同時に保持したり失ったりすることができず、しかしながら、快・苦が同時にもったり失ったりするものだとなれば、快と善は異なるのではないか。快苦が同時にあるとはどういうことか。渇きといった欠乏は苦しい状態であり、渇いているときに飲むのは快いことだとすると、「渇いているときに飲む」場合に、人は苦痛を感じていながら同時に快い思いをしている。さらに飲み終わったときには、渇きは止み、快い気持ちも止んでしまう。また(2) 勇気があり思慮ある人たちは善い人たちであり、臆病で無思慮な人たちは悪い人たちである。さらに愉快にしている人が善い人であり、苦痛を感じている人が悪い人である。また善い人と悪い人が、同じように苦痛や快楽を感じるのであれば、以上から、悪い人は善い人と同じように悪いことになり、同じ程度に善いことになってしまう。これが矛盾だとすれば、快と善は異なるものであると結論すべきことになる¹¹。

(2) の議論を受けてカリクレスは、善い快楽と悪い快楽があることを実は知っていたと手のひらを返す。ソクラテスは続けて、善い快楽とは有益な快楽であり、悪い快楽とは有害な快楽であること、有益な快楽とは何か善いことをもたらす快楽、有害な快楽とは何か悪いことをもたらす快楽であること、さらに苦痛においても駄になるものと害になるものとがあること、これらカリクレスに問う。カリクレスの同意のもと、快楽でも苦痛でも益になるものを選ぶべきで、害になるものを選ばないようにすべきことを結論する。善をあらゆる行為の目的とするならば、その善の目的のためにほかのことはなされるべきであ

るし、快いことについても善いことをめがけてなすべきだ。善と快は単純に対立するものではなく、善と悪が対立しており、悪ではなく善を選びとるべきだと主張されていることに注意を払っておかなければならない。あらゆる快楽を無視したうえで善をなせ、というのではないのだ。あくまで善い快楽を選びとるべきだと言われているのである。また逆に、あらゆる苦痛を選びとらなければならないと言うのではない。悪をもたらす苦痛は避け、善い結果をもたらす苦痛は選び獲らなければならないと言うのである。この区別を混同するならば、禁欲的な善と放蕩的な快楽かといった間違った対立で考えることになってしまう。

さて、ソクラテスいわく、もろもろの快いことのなかから、どのようなものが善いことであり、どのようなものが悪いことであるかを選び分けるには、それぞれの事柄について技術の心得を必要とする¹²。ここで、問い（5）が吟味にかけられる。

吟味（6） 最善を目指す哲学と、快楽だけを目指す弁論術・政治活動と、どちらの仕事を選ぶべきか。（500b-c）

魂の最善を考慮する技術および、最善を無視して快楽のみを問題とする経験（迎合）がある。これは、ポロスとの対話で確認したとおりだ。これは一人の魂についてだけでなく、二人や数多くの人の魂を相手にする場合にも当てはまる。そのため、群れつどう大勢の民衆に向かって、彼らが喜ぶことを語る、弁論術の技巧をこらした大衆演説は、迎合の術である。それは、市民の機嫌をとることに傾き、自分たちの個人的な利益のために、公共のことは無視することである。これでは、市民たちを一層よい人間にするとは言えない。それとは逆に市民にとっての最善のことを念頭において、快いことになろうが不快なことになろうが、言論によって市民ができるだけすぐれた人間になるように話をする弁論術は、立派なものである。欲望のなかでも、人間をすぐれた者にするような欲望は充たし、より劣悪にするような欲望をみたまないということ、これこそがほんとうに人間の徳であるということになる。

それでは、再三にわたって語られてきた「善い」とはどのようなことか。徳福の一致を巡って対立している『ゴルギアス』において、この「善い」ということがこの核心点となる。さらに言えば、ソクラテスの主張の核心が垣間見える箇所である。

吟味（7） 善いとはどのようなことか。（503d-508a）

ソクラテスは言う。職人は、自分が作りあげようとしているものを心において、ある一定のかたちをとるようにしている。肖像画家、家大工、船大工などどんな職人も、自分の作品のどの部分を定めるにもひとつひとつの部分の一定の秩序にかなうようにし、他の部分と適合し調和するよう調整し、作品の全体を秩序づけられたものに組み立てようとしてい

る。物の場合だけでなく、身体や魂を対象とする場合でも、ある種の規律と秩序をもたせようと工夫しているのではないか。魂の規律や秩序に対しては、「法」という名前がつけられている。その秩序、法によって人々は法に従う人や節度のある人にもなり、そうした状態にあることが正義の徳や節制の徳と呼ばれる。市民たちの魂の中に、正義の徳が生まれ不正は取り払われるように、また節制の徳が生まれ放埒は取り払われるように、ほかの美德が生まれ悪徳はさるように心を向けながら、すぐれた弁論家は彼らに語りかけるだろう。

人間は、身体の状態が悪くては生きていても何の得るところもなく、必ず悪い生き方をすることになってしまう。そのため、健康であればもろもろの欲望の充足は問題にならなくても、病気をしているときには、欲するものを与えて満足させることはしないだろう。それと同じく、魂が、無思慮・放埒・不正・不敬虔といった劣悪な状態にあれば、欲望の満足は禁じるべきである。魂がすぐれたものになるのに役立つこと以外は、勝手にさせないようにすべきである。そのため、抑制されることのほうが放埒より魂にとってよいことになる。よい状態である今を維持したり、善くも悪くもない状態を善い状態へ改善しようとするためには、できるだけ悪いことから遠ざからなければならない。悪い状態となれば、善いことがなせなくなる。だから放埒がよいとは言えないのだ、というわけだ。

ここまでくると、カリクレスはもはやソクラテスに愛想をすっかり尽かしているため、もはや互いの納得をもとにした対話となっていない。しかしながらソクラテスは、共同での探求を諦めておらず、異議があれば快く引き受けるとしている。そこでソクラテスが、あらためて議論を要約するに、善い人が善い人であるのは、そこになんらかの「よさ」が具わっているからであるが、そのよさとは、「偶然のでたらめによってではなく、おのおのに本来与えられている、規律と秩序正しさと技術によって、一番見事に具わってくる」(506d)と言う。それぞれに固有な秩序が、それぞれのものに生まれてくるとき、存在するもののそれぞれを善いものにすることになる。そうすると、魂は自己自身の秩序、節度をもつ。そこには、思慮節制、正義、敬虔、勇気が伴う。それらの徳をそなえた人は、完全に善い人だと言える。そして、良い人は、なにごとを行うにしても、よく、また、立派に行うし、幸福である。その逆に無思慮で放埒なものは不幸せなものとなる。ソクラテスの結論は以下のようなものとなる。

幸福になりたいと願う者は、節制の徳を追求して、それを修めるべきであり、放埒のほうは、われわれ一人一人の脚の力の許すかぎり、これから逃れ避けなければならない。そして、できることなら、懲らしめを受ける必要のひとつもないように努めるべきだが、しかし、もしその必要がおきたのなら、それを必要とするのが自分自身であろうと、身内のなかの誰かほかの者であろうと、あるいは、一個人であろうと、国家全体であろうと、いやしくも幸福になろうとするのであれば、その者は裁きにかけて懲罰を受けるべきである。これこそ、ひとが人生を生きる上において、目を向け

ていなければならない目標であると、ぼくには思われるのだ。そして、自分自身に関すること、国家に関すること、すべてをこの目的に傾注しながら、いやすくも仕合せになろうとするなら、正義と抑制の徳がそなわるようにと行動しなければならないのだ。(507d-e)

悪い状態を生み出すと考えられる放埒が、神や他の人間にも愛される者となることはできず、誰とも共同することができず、友愛はありえない。天地、神々、人を結びつけているのは、共同 (koinos)、友愛、秩序正しさ、節制や正義である。だからこそ賢者たちは、この宇宙を「コスモス」(cosmos/秩序)と呼んだのだ¹³。ソクラテスは、ここで細かくひとつひとつの徳について、定義づけようとはしていない。むしろ、初期の対話篇で主題となっていたさまざまな徳が列挙され、それが「節制」「秩序」といったキーワードのもとに総合されていく印象を受けるだろう。このことについては、節をあらためて確認したい。

これまで個人というレベルで語られてきたが、若い政治家カリクレスを前に、複数の人間を扱う政治のレベルに話を切り替えて次のように言う。真の政治家は、「欲望の言うとおりにならず、その方向を向けかえて、説得なり強制なりによって、市民たちがよりすぐれた者になるはずのところへ、その欲望を導いていく」(517b) ことを必要とするのだと。それは、市民たちを相手に短期的な快楽を充足させ、時がたって苦痛や悪をもたらしようにすることではない。しかしながらこれまでの有名な政治家も今の政治家も、善を度外視してしまっている。そういう意味で、ソクラテスは、「現代の人たちの中では、ぼくだけが一人、ほんとうの政治の仕事を行っているのだと思っている」(521d) と言うに至る。最善を目指しているからこそ、仮に市民に青年を堕落させるとの廉で死の危険に晒されようと、成り行きに任せると言えるのである。彼が恐れるのは、死そのものではなく、不正なままに死に至ること、劣悪な魂の状態で死後の世界で過ごすことなのである。

VI. 善いとは何か——善の問い

ひとは如何に生きるべきか。プラトンの対話篇『ゴルギアス』は、正義の問い、徳福一致の問い、人生の問いを遍歴していったが、ソクラテスと対話したゴルギアス、ポロス、カリクレス自身はどのように考えていたか。

彼らは、人を支配すること、自分の思うとおりに行為することに「善いこと」を見た。こうした態度はカリクレスにもっとも強烈にあらわれている。弱い人を支配すること、弱い者より多くをもつことが善いことである。たしかに他人の生を左右できることは、もっともみずからの力能を強く感じるこがらのひとつであろう。たとえば歩くことや、座ること、それだけでなく、地面に落ちている石を手で拾って机の上に置く、ということもみずからの力能である。しかし、そうした行為は多くのひとができることだ。しかしなが

ら、人を、それもそれぞれの意志をもった他人を動かすことは容易ではない。物理的に押したり引いたりするには、腕力や、ひとの身体を動かすために必要な知識が要るだろう。このこと以上に困難であるのは、他人にあることを強いること、誘導すること、可能にさせることといったことがらである。相手の身体的苦痛を伴うような命令によってそうするのか、話し合いによる同意のもとにそうするのかといった違いもあるだろうが、他人をこのように動かすことは容易ではない。武力や物理的な力ではなく、言葉によって人を支配するということは、誰にでもできることではない。みずからの一言で、数多くの人が行為する。多くのひとの命を左右し、うまくことを運ぶといった権力や力能が、みずからの手のなかにある。そう感じられることは、自己の存在そのものに対する強い肯定感や高揚感をもたらすことだろう。また、こうした「力」「支配」観は、不正を醜いとし禁欲的な理想を立てたとしてプラトンを批判する19世紀の哲学者ニーチェが「力への意志」として看取したものに極めて近い¹⁴。

また、自分がみずからの力を認めるだけでなく、他人からも称賛を得て、評価を得ることができれば、また自らの存在に対する肯定感を感じるだろう。ゴルギアスたちは、みずからの能力を認めさせようとする大衆に対しては、真に善いとされることを勘定にいれずに、その場の快樂のみを与える姿勢をもっていることがあらわになった。こうしたあり方を、ソクラテスは技術ではなく迎合と呼ばれる経験にすぎないとみなし、不正かつ醜いことであるとした。力の思想をもつ若手の政治家カリクレスですら、大衆が喜ぶことを熱心に追い求めているにすぎないと、ソクラテスによって明らかにされていた。外部からの評価を得る必要から、相手の評価軸にみずからを寄せて、相手の性格に酷似していくことになるのだ。

彼らに共通するのは、人を支配する力能に幸福を覚える力の思想と、支配する相手の喜ぶことを熱心に探求する迎合の思想の奇妙な絡み合いである。

次に各人の論点の整理してみよう。ゴルギアスは、1) 弁論術は正・不正に関する知識をもたなくてもよいと考え、また2) 弁論術は正しく用いなければならないとしながらも弁論術を心得たものが不正を犯す可能性を残した。ポロスは、1) 独裁者のように国のなかで最も力をもつような者は、その行いが不正であったとしても自分の思うとおりのことをしてもよいと考えたが、2) 社会において不正を犯せば罰を受けることを引き受けていたように、不正を行うことそのものは醜いことであるとしていた。カリクレスは、1) こうした「力」の行使を、欲望・快樂という観点から捉え、快樂の充足を善であり徳であるとし、他の2人よりも純粋なかたちでこれを表現した。しかしながら2) あらゆる快樂が善であるとは言えず、快樂には善し悪しがあることを不承不承ながら認めざるを得なくなった。

こうした3人の知者との対話を通して、ソクラテスの考えは徐々に明らかになっていったものと見える。ソクラテスは、人は、その人の益になる善いことを望むのであって、善くも悪くもないものや悪いことを望むわけではない、という原則を立てている。悪いこ

とをしていたとしても、それは故意にそうしているのではなく、善いと思ってそうしているにすぎないのだと考えた。人は「善い」を目指すものだ、という点では他の対話者とも一致していた。では何が3人の知者たちと異なるのか。ソクラテスの主張は一貫している。人を支配するにしても、相手を喜ばせるにしても、その行為が善いことになっているかどうか、あるいは自らを悪へ導くことになっていないか、それがソクラテスにとって重要なのである。人を支配して自らを悪となし自らを滅ぼすならば、また、大衆を短期的な期間でしか喜ばせることができず長期的に見れば悪くなる方へ導いていくならば、それはその人自身を悪く醜いものにさせてしまう。悪政を敷くことで、多くの犠牲を生みだしたり、多くのひとから反感を買うならば、どれだけ多くの人を支配して幸福感を感じようと、評判だけでなくみずからの命を危うくしてしまう。身体的な命だけでなく、形振り構わないような心の持ち主となってしまいかねない。自らにとっても短期的な快樂に終始するなら、健康を損なってしまう。ポロスが言った、不正を行いつつも幸福な人がいる、という反論は、ソクラテスからすれば反論にならない。今は幸福であろうとも、将来には身を滅ぼすだろうから、と言えるからである。悪いことをなすと、心身ともに醜悪となってしまう。このことは比較的にわかりやすい。だからこそ、できるだけ悪を避けよ、という格率にも説得力が生まれる。

それでは反対に「善い」とは何か。これこそ「ひと如何に生くべきか」との問いとともにソクラテス＝プラトンが問い続けていたものと思われる。しかしながら「善いとは何か」という問いは、「悪いとは何か」に答えるより難しい。その人にとって益になること、ためになること、とこのようにソクラテスは答えているが、同義的な定義になっており、それ以上に明確になされたものはない¹⁵。ソクラテスは、より善く生きたいと思うことそのことを明瞭に語るし、大衆を善くすることにこそ政治家の使命があるとカリクレスには説くにもかかわらず、そうなのだ。しかしながら、「その人のためになること」、これがプラトンの取り出した「善い」の本質である。では、何がその人のためになることなのか。またどのようにすれば、人は幸福となるのか。こう問うと瞬間に、目の前にさまざまな分岐が生じているように見える。ソクラテスとその対話者たちが対立するのは、徳福一致の問いについてである。正しく善く生きることが幸福につながるのだ、とソクラテスが考えるのに対して、対話者たちは総じて不正を犯すことを通じて得られるもののなかに幸福をみた。結局、彼らはソクラテスに充分に説得されたとはいえないまま対話を終えている。ソクラテスの語る善い生が、どこか禁欲主義的であるように見えることは何を意味しているのか。また、この対話の結果に横たわっているのは、何を善いとみなすかはさまざまであるという価値の相対性の問題だろうか。

しかしながら、善い/悪いが価値の問題である以上は、価値のあり方がさまざまにありうるとするだけでなく、それぞれの価値観において、どのように善い/悪いが生きられているか、またどのような自己了解を伴っているかを通すのでなければならない。ソクラテスにとって、善いはどのように現れ、説明されていたか。最後に「善い」の性格を考えて

みたい。ソクラテスは、カリクレスに「善い」を説明するにあたって次のように言う。思慮、節制、正義、勇気、友愛、敬虔といった諸徳が、調和をもって備わっていること、これを完全に善い人である。またその人が、立派であり、美しくあり、幸福である。完全に善い人とは、そのような人のことであるが、「善い」とは、それぞれのものやひとに「固有の秩序」が生まれてくるときに、存在するもののそれぞれを善いものにするのである。善さとは、決して外部から押し付けられてくるものではなく、そのもの自身のあり方からあらわれてくるものである。だからこそソクラテスは言う。「世の大多数の人たちがほくに同意しないで反対するとしても、そのほうがまだしも、ほくは一人であるのに、ほくがほく自身と不調和であったり、自分に矛盾したことを言うよりも、ましなのだ」(482c)と。善いは、それぞれ固有の領域がある。そして、「その人のためになること」「善い」は、自己了解との深いかかわりのなかにある。しかしながら、ソクラテスが「共同」という言葉と宇宙との世界観を持ち出し、神との関係をあらわす敬虔、他の人たちとの関係を表す友愛・正義とを重視していることからすれば、まったく自閉したかたちで自身のあり方が存在しているわけではない。したがって「善い」とは外との関わりのなかで、みずからのなかに生まれてくるのである。

したがって善いとは、自身の変化とともに変化するものである。秩序のあり方、自身のあり方、周りの変化が伴うのであれば、「善さ」の現れ方も異なってくるからである。そこにまた、善き変化と悪しき変化が起こりうるのである。誰かひとりでも人をすぐれた者にしたことがないとされた、カリクレスはまだ政治に携わるべきではないとソクラテスは勧告する。対話を終える直前となってカリクレスに言う。「ほくたちは共に、そのようにして徳を修めたなら、そのときになって始めて、もしそうすべきだと思われるなら、政治の仕事にたずさわることになろう」(527d)と。

人は「善い」を追求するが、「善い」とは自分にとってどのようなものか、あることがらがほんとうに善いと言えるのかどうかを探求することを通して、そうするのだ。これが、ソクラテス=プラトンが打ち出した、よく生きるための哲学なのだ。

参考文献

『国家』(藤沢令夫訳) 上下2巻、岩波文庫、岩波書店、2008年。

『ゴルギアス』(加来彰俊訳) 岩波文庫、岩波書店、2007年。

『プロタゴラス』(藤沢令夫訳) 岩波文庫、岩波書店、1988年。

『法律』(森進一ほか訳) 上下2巻、岩波文庫、岩波書店、1993年。

『ティマイオス』(岸見一郎訳) 白澤社、2015年。

注

¹ 本論は、本研究センターに所属する研究会「てつがくLocal Trainの会」によるプラトンの対話篇の読解と並行して著者が作成したノートをもとにしている。また「初期

プラトンの哲学——魂の世話をめぐる探求」(本誌、第7号、2016年)「初期プラトンの哲学(2)——『プロタゴラス』における快樂主義について」(同、第8号、2017年)の続編とする。

² 田中美知太郎『ソフィスト』(講談社学術文庫、講談社、1976年、初出1941年)、および納富信留『ソフィストとは誰か?』(人文書院、2006年)を参照。

³ 『法律』第10巻。

⁴ 『法律』第10巻のほか、『ゴルギアス』第3部、「第七書簡」参照。

⁵ ソクラテスは、こうした弁論術に対して言う。「その力の大きさは、何か人間業を超えたもののようにはわたしには見えるのですからね。」(456a)

⁶ 『プロタゴラス』には、ソフィストたちが若者たちに対して算術、天文学、幾何学、音楽などさまざまな専門教科を学ばせようとして、若者たちが逃げ出していたことが描かれている。プロタゴラスは、ゴルギアス同様にこうしたさまざまな専門教科を学ばずとも、国事においてすぐれたものとなるよう教育することができると公言している(318a-319a)。

⁷ ここまでは、プラトンの他の初期著作と似た流れをもっている。議論の対象となる事柄についてその本質を問い、吟味しながら内的矛盾があらわになる。他の著作では、何度か別の問い方が試みられ、結局は答えがあらわれないままに結末を迎える。たとえば『ゴルギアス』と同系統の問題を扱う『メノン』『プロタゴラス』は、「徳とは何か」「徳は教えられるか」といった問いに答えられず、アポリアを迎えている。しかし『ゴルギアス』は、知識の定義や伝達可能性といった問いには向かわず、幸福・不幸という軸において考察を試みており、ここに私たちは中期対話篇への橋渡しの要素を感じるのである。

⁸ ポロスの次には、カリクレスが対話者としてあらわれ、ここへさらに快樂・苦痛という軸を導入する。「プラトン『ゴルギアス』篇にみる善の諸相」において、白根(2014)は真善美の価値連関のなかで『ゴルギアス』を解釈している。善・悪の基準として、快苦、美醜(評判)、正と不正を取り出し、それぞれカリクレス、ポロス、ゴルギアスに対応させることを試みている。

⁹ 『ゴルギアス』記者の加来は、4つの技術を以下の観点で整理している。1) 配慮となる対象(魂の世話をする技術:政治術、身体の世話をする技術)、2) 配慮の仕方(良好な状態の維持・増進:立法術・体育術、不良な状態からの回復:司法術・医術)。

(対象)	(技術)	(経験)
(1) 精神——	政治術 ——	立法術 …… ソフィストの術
		司法術 …… 弁論術
身体—(名称なし)—	体育術 ——	化粧法
	医 術 ——	料理法

¹⁰ このカリクレスの忠告に、ソクラテスは思いがけない幸運にめぐりあったと感じる。

というのもソクラテスいわく、「魂が正しい生活を送っているか否かを、十分に吟味しようとするなら、ひとは三つのものを——つまり、知識と、好意と、そして率直さとを、具えていなければならないと、ほくは思うのだが、君はそれらを三つとも、全部具えているからなのだ」(487a)。これは、ソクラテスにとって哲学的対話の条件と言えるものである(拙論「初期プラトンの哲学—魂の世話をめぐる探求—」参照)。

- ¹¹ (2)の議論は比較的理解しやすい論理構成であるが、(1)については詭弁的と考えられる。ここでは仔細に立ち入らないが、快楽を「欠乏の充足」として限定的に解釈していることは注意してよい(伊藤斌「プラトン『ゴルギアス』における快楽——善考察のための予備的段階」参照、『哲学論文集』第6号、九州大学哲学会、1970年)。例えば『国家』においては、「欠乏からの解放」と中間状態から得られる「真の快楽」とを区別した上で、後者を優れたものとしている(583b-588a)。

- ¹² 快苦と善悪の問題を扱う『プロタゴラス』においては、同じ問題が扱われる。ここでは、善と快の区別のうえでの議論ではなく、善と快を同じものとするものとして進められている。ここでは、今「この瞬間」の快楽や苦痛だけで良し悪しを判断するのではなく、将来得られるであろう快楽や苦痛をも勘定に入れた上で選択せよと述べられている。つまり時間軸を導入することで、善し悪しを計るべきだとするのがここでの要点であり、いま苦痛を伴うものであろうと将来より大きな快楽が得られる善いものであればそれが選ばれるべきであるし、いま快楽があろうと将来の大きな快楽を損なうような小さな快楽であればそれを選ぶべきではないと主張されているのである。そのため、『ゴルギアス』で述べられる善と快の区別と、『プロタゴラス』で述べられる善と快の同一性とのあいだに矛盾を見る必要はない。「君は、ちょうど目方を計るのが上手な人のするように、快と苦とをそれぞれまとめて秤にかけ、さらにこの秤のさおに、近さと遠さの分銅を乗せて、そのうえでどちらの側が重いかを言うことにしたまえ。つまりそのようにして、快と快との目方をくらべる場合なら、目方より大きくより多いほうをつねにとるべきだし、苦と苦をくらべる場合なら、より少なくより小さいほうをとるべきだ。また快と苦との目方をくらべる場合なら、快の重さが苦の重さを超過すれば、近い苦痛が遠い快楽に負けるにせよ、遠い苦痛が近い快楽に負けるにせよ、それにはかわりなく、その多いほうの快楽をもつ行為を行うべきだし、逆に苦の重さが快の重さを超過すれば、行うべきではないのだ」(356b-c)。「ところで実際には、われわれにとって生活を安全に保つ途は、快楽と苦痛とを正しく選ぶこと、その多少、大小、遠近を誤たずに評価して選ぶことにあることが明らかになったのであるから、そこに要求されるものは、まず第一に、計量の技術であることは明らかではないだろうか。それは、相互のあいだの超過と不足と等しさをしらべるものなのだから」(357a-b)

- ¹³ 後期の著作『ティマイオス』は、善や秩序という観点をもとに、天地開闢の起源から「世界」「自然」を貫徹して語り通す労作である。世界・自然という自然科学の対象に

対して、価値的な「善」から説明する語り口は、現代からすれば確かに突飛なものと映るが、人間にとっての「善い」が、ものごとを考えるうえでのたしかな根拠となることを示そうとしたものとして考えることができる。

¹⁴ 『権力への意志』（上下巻、ちくま学芸文庫、筑摩書房、1993年）。

¹⁵ 『国家』においては、善について快樂や知恵といった定義を退けながら、「すべての魂がそれを追い求め、そのためにこそあらゆる行為をなすところのもの、——それがたしかに何ものであると予感しながらも、しかし、そもそもそれが何であるかについては、魂は困惑してじゅうぶんに把握することができず、さらに他の事柄の場合のように、動かぬ信念をもつことができないでいるもの、——そしてまさにそのために、そういう他の事柄についても、そこに何か役に立つものがあつたとしても、とらえそこなうことになってしまうのだが」（505e）としている。そこで善の実相（イデア）そのものではないが、善の子どもにあたるものとして、太陽の比喩や洞窟の比喩を語るのである。善については、初期対話篇での仕事を踏まえて中期の対話篇へ引き継がれている。善を求めるあり方としては、『パイドン』『饗宴』『国家』において「イデア」「恋」といった概念に引き継がれ、複数の人間にわたる善、つまり社会・政治のあり方については、『国家』において哲人思想へと引き継がれている。